

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 10 日現在

機関番号：14401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720091

研究課題名(和文) 能楽の近代化の研究 明治・大正期能楽上演記録データベースの構築を中心とする

研究課題名(英文) The Modernization of Noh Theatre: based on construction the database consisting of information from Noh and Kyogen performance records between the Meiji and Taisho periods

研究代表者

中尾 薫 (Nakao, Kaoru)

大阪大学・文学研究科・講師

研究者番号：30546247

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円、(間接経費) 480,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、明治維新によって壊滅的危機をむかえた能楽を支え、明治・大正期かけて能楽の存続と復活をめざして設立された庇護者の活動について、その理論と実態との相互関係を分析することをめざし、そのための基礎データとして明治・大正期の能楽上演記録のデータベースの構築を中心的な活動に据えた。雑誌『能楽』や新聞記事を補足資料とし、坪内逍遙、池内信嘉、高木半の能楽分析論、能楽改良に関する諸説を詳細にする研究論文2本、研究発表2本を発表してきた。そこでは、明治・大正期の能楽を支えたエネルギーとしての素人や文化人の支援や意見が、どのように能楽の活動に影響を与えたか具体的に明らか提示できたと考えている。

研究成果の概要(英文)：The aim of our study was to determine the impact sponsor activity had on Noh theatre during the Meiji period. For this purpose we created a database consisting of information from Noh and Kyogen performance records between the Meiji and Taisho periods. In addition to this we published two papers on the modernization of Noh Theatre: "The Modernization of Noh theatre and Nakaba Takagi: His Personal History and Reactions to his Nationalistic Idea of Noh Theatre Reform" Machikaneyama Ronso 47, December 2013 and "The Modernization of Noh theatre and IKENOUCHI Nobuyoshi, Engekigaku Ronso 12, July 2012. Based on the findings from these two papers, it became clear that public support greatly influenced the professional Noh actors' stage performances.

研究分野：芸術学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：データベース 能楽 近代 上演 番組 日本文化 大衆化 素人

1. 研究開始当初の背景

明治維新によって壊滅的危機をむかえた能楽界において、能楽の存続をはかるために行われた活動の一つとして、能楽の価値の再発見をめざす能楽愛好者、学者たちによる研究会「能楽文学研究会」があった。この研究会で議論され、解明された事由は、現在に継承される能楽研究の活性につながる。一方で能楽の公的な保護政策の実現への働きかけや、提言をうながすことが、その目標にあったことは、それほど留意されてこなかったと思われる。その「能楽文学研究会」の設立と関わりが深い「能楽社」「能楽会」といった民間資本の能楽保護団体の取り組みは、その具体的な実践の場として注目される。すなわち、旧時代的な能楽体制の見直しと、それを打開するための試行錯誤が行われたとみられる。

しかし、「能楽文学研究会」や「能楽社」「能楽会」の能楽へのはたらきかけや理念が、どの程度当時の能楽の実状に則していたのか、そして、どの程度実現されたのかといった詳細の分析は、これまでほとんどなされてこなかったが、これらの活動の実態と影響を分析することは、能楽の近代化が現実問題として行われたのか否かという視点で検討されるべき問題と考えた。この時期の能楽の近代化という名でとらえうる変容の実態と、その原因を知ることは、能楽の歴史を知るうえで、現在の能楽にもつながる問題として重要と考えた。

そこで、本研究では、明治期・大正期にかけて能楽の存続を目的に活動をした「能楽文学研究会」「能楽社」「能楽会」の活動、人物でいえば坪内逍遙・池内信嘉らの活動と理念について中心的に考察していくことにした。

また、その分析のために必要となるのは、明治・大正期の能楽上演の実態を知る上演記録に関する基礎資料であると考えた。明治・大正期は、能楽専用雑誌の発行が相次ぎ、また各種能舞台における能楽上演が盛んであるが、その上演の記録を知るためには、これまで複数の雑誌類を渉猟する必要があった。そこで、本研究では、まず明治・大正期の上演記録を、雑誌『能楽』を始めとする雑誌、新聞記事などを参考に、能楽の上演記録を上演日時、曲名、小書名、出演演者名、上演場所で検索可能なデータベースの構築をめざし、本研究の目的遂行のみならず、近代能楽史研究の一助となることを目指すこととした。

2. 研究の目的

本研究期間内においては、明治維新によって壊滅的危機をむかえた能楽を支え、明治・大正期かけて能楽の存続と復活をめざして設立された庇護者の活動について、その理論

と実態との相互関係を分析すること目的とした。そして、最終的には「能楽社」「能楽会」といった能楽支援者の活動を、能楽の「近代化」という視点でとられ、能楽はどのように近代化の潮流にのったのか、近代化は行われたのか否かという論点で論ずることを目的とした。

また、本研究の遂行や、近代能楽史の解明において、明治・大正期の能楽上演の実態を知る事が不可欠と考え、雑誌『能楽』を始めとする雑誌、新聞記事などを参考に、能楽の上演記録を上演日時、曲名、小書名、出演演者名、上演場所で検索可能なデータベースの構築を行うことも、本研究の二つ目の目的とした。

3. 研究の方法

本研究の目的達成をめざすために、二つの柱をもうけた。一つは、明治期・大正期にかけて能楽の存続への活動を強力に支えた「能楽社」「能楽会」の活動の一環としてとらえられる坪内逍遙・池内信嘉らの「能楽文学研究会」の活動についての分析である。この研究会の成果は、池内信嘉が発行した、能楽専用雑誌『能楽』誌上で、随時紹介されている。その諸論とその議論が行われるに及んだ背景を把握することで、当時の能楽がかかえる問題が明らかにされると考えた。当時の社会の中で能楽が対峙した問題というのは、いいかえれば、急激に近代化されつつあった社会との間に生じたズレにあたる場合と、もともと能楽が持つ芸術的特徴ととらえられる部分もあるであろう。この視点をより具体的な事例から分析をするために、雑誌『能楽』誌上に掲載された、議論を中心に池内信嘉、坪内逍遙らの論点を整理するところから研究を始めた。なお、新聞記事やその他の能楽専用雑誌等を補足資料とし、特に、彼らの能楽分析論、能楽改良に関する諸説を分析することに重点をおき、それらの論が能楽上演や能楽師の活動に影響を及ぼしたかを検討した。

本研究のもうひとつの柱は、明治期の能楽の実態を知るために重要なデータと考えたのが、能楽の上演記録の蒐集と研究資料として便宜性のあるデータベースの構築である。研究開始から1年目～2年目においては、データ入力のためにアルバイトを雇用し、効率的になるだけ多いデータを蓄積することを中心的な活動に据えた。具体的には、早稲田大学演劇博物館所蔵の明治期能番組〔明治初年頃京名古屋等諸家能番組〕(イ 11-6201、イ 11-665)〔新聞切抜能評及番組〕(イ 11-630)〔前田慶寧贈位祝賀前田家能番組〕(イ 11-634-1～4)〔明治期能番組〕(イ 11-665)〔宮内省御用御能並諸家御能番組控〕(イ 11-628)〔明治十三年～十六年諸家御能番組〕(イ 11-629)〔前田恭敏追善前田家能番組〕(イ 11-634-4)の7点、雑誌『能楽』所

載の上演記録、上演告知欄の上演データ、『梅若実日記』所載の上演記録からの抽出である。これらの記事から、上演日時、曲名、小書名、出演演者名、上演場所、会名、主催者、上演形式(能・狂言・仕舞・独吟など)で検索ができるようデータの入力を行った。

4. 研究成果

本研究は、明治維新によって壊滅的危機をむかえた能楽を支え、明治・大正期かけて能楽の存続と復活をめざして設立された庇護者の活動について、その理論と実態との相互関係を分析することをめざし、そのための基礎データとして明治・大正期の能楽上演記録のデータベースの構築を中心的な活動に据えた。分析の対象は、「能楽文学研究会」で発表、議論された問題に焦点をあて、新聞記事等を補足資料とした。

このうち、坪内逍遙、池内信嘉、高木半による能楽分析、能楽改良に関する説に、能楽の近代化をうながす説、実践がみいだせた。本助成研究機関内においては、その点を詳細にする研究論文2本、研究発表2本を発表してきた。

研究論文(1)では、能楽の近代化と高木半 その履歴と能楽改良論への能役者の対応をめぐって(『待兼山論叢』47号、美学篇、pp1-47、大阪大学文学会、2013年12月)においては、大阪出身の熱心な能楽愛好者であった高木半が発表した能楽改良論について分析する足がかりとして、高木半の履歴についての整理と、能楽界との関係性について明らかにした。そこでは、明治・大正期の能楽を支えたエネルギーとしての素人や文化人の支援や意見が、どのように能楽の活動に影響を与えたか具体的に明らか提示できたと考えている。

研究論文(2)「能楽の近代化と池内信嘉 - 能楽の改良し得らるゝや否や - 」(『演劇学論叢』12号、pp7-23、大阪大学演劇学研究室紀要、2012年7月)においては、明治・大正期の能楽史においてかかすことのできない人物である池内信嘉による能楽改良論と、それに関わる能楽のおかれた状況について、池内自身が発行する雑誌『能楽』の記述を中心にたどっていった。そこでは、近代化する社会環境の変化のなかで、とりのこされる伝統演劇「能楽」への危機感と、どこまで改良すれば能楽の芸術性を損ねないのか議論が行われており、そのなかで池内信嘉がたどりついた結論として、演能時間の短縮があったことと、それに対する能楽界の対応について検証した。

研究発表(1)「近代能楽の一事象・続考」「東アジア古典演劇の「伝統」と「近代」 - 伝統の相対化と文化の動態把握の試み - 」(2013年度第1回研究会、国際高等研究所研究プロジェクト) 於：国際高等研究所、2013

年8月28日」においては、研究発表(2)において、近代における西洋演劇享受と能楽理解との影響関係を考察する必要があることになったことを受けて、坪内逍遙の論を中心とする「夢幻劇」論展開のプロセスをひもといた。ここでは、坪内逍遙と森鷗外の「没理想論争」(明治25年)から、逍遙の「史劇論」(明治26年)において近松以来の劇を「夢幻劇」として批判したことを軸として、能楽が西洋演劇と比較されることで、どのように分析され、いかなる新しい価値観を付与されてきたのか把握することを試みた。

研究発表(2)「近代能楽の一事象 「夢幻能」という用語の成立過程試論」(「東アジア古典演劇の「伝統」と「近代」 - 伝統の相対化と文化の動態把握の試み - 」2012年度第2回研究会、於：国際高等研究所、2013年2月23日)においては、明治・大正期の能楽研究の土壌から生まれた「夢幻能」という語の成立背景をめぐって考察した。雑誌『能楽』誌上で、最初に「夢幻的能」という語を用いて能の分類したのが、明治38年11月の池内信嘉による能の分類法に関する論考であることを再確認したうえで、その論考を著したきっかけとして、同年7月の坪内逍遙の能楽文学研究会における能楽研究への提言があることを紹介した。さらには、坪内逍遙がそれにさきだつ明治28年3月の段階で、能狂言は「価値ある夢幻劇」であると言及する「夢幻劇」に関する論考を紹介し、逍遙の「夢幻劇」への着眼点が、池内信嘉の分類論に影響を及ぼしたのではないかと考察をした。

明治・大正期の能楽の実態を知るために重要なデータと考える、研究資料として便宜性のある明治・大正期能楽上演データベースの構築作業においては、予定していた早稲田大学演劇博物館蔵の明治期能番組7種のデータ抽出を完了させ、雑誌『能楽』については5巻までデータの抽出を終えている。本研究機関内では、データベースの公開にまで完了することはできなかったが、個人ホームページを通じて、近々に随時公開することを目指して、作業を継続させているところである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

1、中尾薫「能楽の近代化と高木半 その履歴と能楽改良論への能役者の対応をめぐって(『待兼山論叢』47号、美学篇、pp1-47、大阪大学文学会、2013年12月) 査読無

2、中尾薫「能楽の近代化と池内信嘉 - 能楽の改良し得らるゝや否や - 」(『演劇学論叢』12号、pp7-23、大阪大学演劇学研究室紀要、2012年7月) 査読無

〔学会発表〕(計 2 件)

1、中尾薫「近代能楽の一事象・統考」「東アジア古典演劇の「伝統」と「近代」- 伝統の相対化と文化の動態把握の試み - 」(2013 年度第 1 回研究会、国際高等研究所研究プロジェクト) 於：国際高等研究所、2013 年 8 月 28 日) 査読無

2、中尾薫「近代能楽の一事象 「夢幻能」という用語の成立過程試論」(「東アジア古典演劇の「伝統」と「近代」- 伝統の相対化と文化の動態把握の試み - 」2012 年度第 2 回研究会、於：国際高等研究所、2013 年 2 月 23 日) 査読無

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中尾薫(大阪大学文学研究科)

研究者番号：30546247

(2) 研究分担者

該当なし

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

該当なし

()

研究者番号：